

## 尾張徳川家伝来・東京国立博物館所蔵「青磁琮形瓶」の一考察 —近世大名家における中国製青磁製品の受容にみる唐物意識の変遷—

ながひさ ともこ

長久智子 (徳川美術館)

## 発表要旨

9  
時  
20  
分  
—  
10  
時

松ヶ崎・西キャンパス内センターホール

東京国立博物館が所蔵する「青磁琮形瓶」は、中国古代の玉製祭器を象った南宋時代の青磁製品であり、かつ皇帝専用の器物を焼造した官窯製品の日本伝世例の代表作として、1978年に重要文化財に指定されている。本作品は尾張徳川家に「経筒水指」として伝来し、尾張家19代徳川義親(1886-1976)の長女・絹子の婚姻に際して嫁資として持ち出された後、古美術商で蒐集家でもあった廣田松繁氏の寄贈によって現所有先へ納められた来歴を持つ。一方、本作品に関連して、宋時代以降の青磁製品や日本での流通、使用については美術史および考古学の見地から検討が行われており、茶道史研究においても唐物受容の視点から中世の舶載陶磁について考察がなされてきている。しかし、本作品の個別検討、また近世大名家における中近世唐物の位置づけや使用については未だ十分な検討がなされていない。また尾張徳川家伝来の青磁製品についても、これまで体系的に検討されていないものの、南宋時代から清時代までの官窯、龍泉窯、景德鎮窯、同安窯系ほか、時代・製作地とも多岐多様であり、しかも他近世大名家の什宝が殆ど散逸してしまっている中で、当家ではそれらがまとまった形で蔵帳類とともに伝世している点で、高い資料価値があるといえる。

そこで、本発表は上記のような各分野の先行研究の成果を踏まえた上で、本作品を尾張徳川家に伝来した中近世舶載の中国製青磁製品中で位置づけ、その受容のあり方と、背景にある中世と近世の唐物意識の変遷を明らかにすることを目的とする。

近世を通じて御三家の筆頭として徳川將軍家に次ぐ高い家格に位置づけられていた尾張徳川家には、尾張家初代義直が父・家康から分配された道具をはじめ、幕末まで様々な道具類が什宝として納められた。本作品がいつ什宝に登録されたのか、尾張徳川家の各種蔵帳の記述の殆どは名称のみで詳細が不明であることから、容易ではないものの、尾張家初代義直の生前及び歿後に尾張家2代光友に相続された品物の目録帳である慶安4年(1651)「上御数寄道具帳」に、「南蛮芋頭水指(大名物)」、「備前水指 銘 青海(重要文化財)」の次に「御水指 青磁経筒 壺ツ」の記載があり、これを本作品の蔵帳での初出とみる。これより遡って寛永13年(1636)徳川3代將軍家光の江戸藩邸への御成に際しては、御鎖間に「御水指 経筒 青磁」が用いられていたことも文献史料に残っている。このように、早い段階では高い位置づけを与えられていた本作品であったが、最終的には明治時代後期の什器目録では最も低い格付である「第参部」に分類され、「御慶事御道具」として出されたのであった。こうした価値づけの変遷をもつ本作品が代表する、近世において相対的に下げられていった中世唐物・青磁製品の役割とその終焉は、すなわち近世「唐物」の多様化と武家儀礼の場での飾り道具の指向の変化を如実に反映していることを本発表の結論とする。